

# 常燕生について

## —— 1930年代半ばの思想を中心に ——

魏 秀美

### はじめに

本稿は五四運動に参加した共和国第一世代の学生知識人の一であり、中共に拠ることなく民族自立と民主主義の実現をめざして活躍した中国青年党の一員でもある常燕生に光を当て、一知識人としての彼の思想とその史的意義に迫ろうとするものである。中国青年党の中でも中国民主党派の研究においてはまだまだ十分ではない。常燕生を対象とした先行研究が見当たらない為、まずは常燕生その人となりに関する伝記的記述を中心としながら、彼の人生観である生物史観について迫りたい。

### 一、五四時代の常燕生

常燕生<sup>1</sup>の名を一躍有名にしたのは、先鋭的啓蒙雑誌『新青年』第三卷1号(1917年3月1日)に掲載された陳独秀宛ての書簡(「北京高等師範預科生晋后学常乃惠一致独秀」)に端を発する。『新青年』の啓蒙を受けた共和国第一世代の若い学生知識人は、新文化運動の最中に次々と愛国的救国団体を組織していった。その一つに1918年10月20日に北京で創立した国民社がある。これは、同時期に成立した新潮社が哲学や文学の方面を代表していたのに対し、政治や社会問題の方面を代表していた。<sup>2</sup> 国民社は反帝救国の宣伝を重視しており、<sup>3</sup> 政治問題に最大の関心があった。その宗旨は中国の民衆を国民の水準にまで鍛え上げること、国貨の提唱などである。当時『新青年』で盛んに論じられた伝統思想の破壊に対し、『国民』の側では「新旧思想即ち資産階級思想と封建思想の闘争に対し、往々にして妥協調和の態度をとった。…常乃惠の「建設論」は更に一步進んで政治から新旧調和の折衷主義思想を発揮した。」<sup>4</sup>という。

ここで常燕生は、新旧の矛盾する闘争が存在するのは今日の中国社会が不安

なことが原因であり、調和こそが国家・社会の改良進歩の方法であると考えていた。

常燕生の最大の関心が政治問題にあったことは、彼が胡適に対し『努力週報』の内容を専ら政治改革の鼓吹にすべきだと手紙で進言した事実<sup>5</sup>によっても示されている。

五四以後、知識人の間でマルクス主義の研究が流行し、『国民』でもマルクス主義が紹介された。常燕生も例外ではなく、二巻第2号（1920年6月1日）、3号（10月1日）にかけてW. Paschal Larkin 著『馬克思歴史的唯物主義』の翻訳を行った。しかし、「これらの文章は客観主義的紹介に過ぎず、決して作者・訳者がマルクス主義やソ連への賛成を示しているのではない」<sup>6</sup>のであり、これを契機に常燕生がマルクス主義を受容するということにはなかった。

以上を総括すれば、常燕生の思想の出発点は救国にあり、相継ぐ国家の主権喪失という民族的な屈辱を嚙締めながら、終始一貫、国家の大事に最大の関心を寄せつづけたのである。

党機関誌『醒獅』において、常燕生は1927年10月以降「聯省自治研究」なる長編の学術専門論文を発表している（「聯省自治與革命的新戦略」、『醒獅』152-7期合刊、1927年10月10日に始まり以後「聯治救国的歩驟」の題名で不定期に連載）が、これは陳善新によれば党中央からの指令によって着手した研究であり、<sup>7</sup>彼の自発的意思によったものではないので、彼の思想としてここで扱わない。1931年創刊の機関誌『民声週報』（陳啓天編集）においては、常燕生は日本帝国主義の侵略に対する強い危機感から「野戦抗日」を主張するが、<sup>8</sup>その論旨は概ね国民政府・国民党の対日妥協政策に対する不満、ソ連との連携、周辺の弱小諸国との連合、国際連盟への提訴など外力に依存して解決しようとする軟弱姿勢への批判、経済ボイコット運動やゲリラ戦による徹底抵抗の主張に要約できる。常燕生の思想的転換の発端は彼の二つの著作『生物史觀与社会』、および『社会科学通論』（いずれも「生物史觀」の入門書と位置付けられている）を発行した時期に求めることができる。発行年月日、および発行部数や販売部数など詳細な数字は明らかでないが、黄欣周によれば、『生物史觀与社会』の発表は1934年初夏以前である。<sup>9</sup>故に常燕生が生物史觀の研究に没頭した時期はおよそ1932年前後とみられ、党内ではその第一人者であり、これに触発される形で黄欣周、宋漣波らが『国論』に於いて研究・発表している。<sup>10</sup>したがって、生物史觀は『国論』創刊時には既に常燕生の人生觀、信仰として到達していた。

『国論』は換言するならその集大成ということになるろう。

## 二、『国論』の創刊と生物史観の提唱

1934年冬、上海において、左舜生主宰による青年党の臨時全国代表大会の席上で、雑誌発行の準備が決定された。雑誌発行の意図は、「国家民族を至上とする思想を提唱し、やがてむかえることとなる国族（後述）間の生存競争のために精神的準備をする」ことにあったから、<sup>11</sup>彼らがここで最も重視していたのは抗日戦争であった。こうして1935年7月20日、常燕生を中心に創刊されたのが青年党の機関誌『国論』である。「我々はここで思想を論ずるのであって、政治を論ずるのではない」<sup>12</sup>という決意が示すように、従来 of 機関誌で積極的に行ってきた政治批判に替わり、思想について論じる点に特徴があった。これは創刊時の陳独秀編『新青年』を彷彿とさせる。『新青年』もまた最初は政治を語らないことを宗旨としていたことは周知のとおりである。

月刊のこの雑誌は途中、常燕生が上海を去る直前の第一巻第六期（1935年12月）までの間、彼の手によって編集されていた。ここで彼が展開している論理は一貫して生物史観に立脚したものである。

常燕生が思想問題に言及せざるを得なかった要因の一つには当時の中国思想界で唯物史観が最も有力だったことが挙げられる。清末、嚴復の翻訳・紹介によって中国に輸入された進化論は、知識人の間で人生観や信仰として受容され、理解されていた。続いて社会主義や唯物史観等に関する書籍が大量に紹介され、研究され、「進歩的な人達」の思想が社会主義的色彩を帯び、<sup>13</sup>一九二九年から三一年の間に社会主義左傾の思想が広く中国青年知識階級の中に浸潤していた。<sup>14</sup>先覚的な知識人の間で人生観やイデオロギーを進化論から唯物史観へと代え、それが知識人の人生観やイデオロギーもしくは革命の方法として主流となっていた。故にもはや進化論は時代遅れと見なされていた。常燕生は中国におけるこうした左傾思想の流行の原因は、共産党が多額のルーブルを出資して中国国内に数十の書店を開設し、そこから毎年のように千種類近くの大量の左傾理論の書籍雑誌が発行されていることにあると指摘し、それはソ連が買収してつくりあげた大規模な系統的文化的侵略であると論じた。<sup>15</sup>当時の中国思想界において唯物史観が最も優勢であることは常燕生自身も認識しており、<sup>16</sup>こうした状況に対して強い危機感を抱いていた。中国共産党には系統的理論として唯物史観があり、それは確かに中国思想界の主流を占めている。故に常燕生は

中国共産党を批判するにあたり、政治的批判によるのではなく、同じく系統的な理論をもって思想的武器にした。それが生物史観であった。彼は生物史観で国家主義思想を理論的に補強した。

常燕生は「国家高於一切（国家はあらゆるものよりも大切）」の人生観を確立することにより新中国を建設し、被抑圧国の立場から強権国家へと進化することで国難を克服しようとしていた。<sup>17</sup>

我々は中国が直面している問題が単に政治問題なのではなく、社会全体の組織であり、全体の意識形態であり、国民全体の精神力の問題なのであると認識している。これらの問題は一朝一夕に解決できる問題ではなく、これらの根本的問題の解決なしには一切の表面的な論争は、空虚である。言い換えるなら、中国が人生の観念と方式を改めなければ、現代の戦線に追いつくことはできない…<sup>18</sup>

このように、常燕生は中国危機の根本的原因を国民全体の集団意識の欠如と国家体制の不備の中に求めたのである。常燕生は中国社会全体の改革の必要性和、中国人の人生観そのものを覆し「国家はなによりも大切である」という人生観（すなわち国家主義）に刷新せねばならないと考えた。この為に用いられた理論が生物史観であった。それでは、彼の哲学に対する見解を見てみよう。

現在、このように国家の危機が厳しい時期に哲学を講じること…中国は現在国難の時期であり、どのようにこの問題に対処していくかは大変困難なことである。それはここに関連する政治、経済、社会、社会文化さまざまな問題のためである。問題に正しく対処しようと望むなら、まず必ず上述の多くの問題すべてに対して正確に認識しなければならないし、また必ず先に正確な思想過程から帰納して正確な社会科学の観点を導き出さねばならない。そうでなければ根本的な観点は依然として誤ったまま、提出する法案も誤ったものとなる。国難に正しく対処できないばかりか、時にはかえって国難の紛争性を増すこともあるだろう。

…私は一切の社会の偉大なる変更は、すべて堅実で系統的な哲学を基礎とせざるをえないのだと認識している。私の言う哲学とは決して只幻想にたよるだけの玄学ではなく、正確な社会科学を出発点として造りあげた人生哲学と社会哲学である。<sup>19</sup>

つまり、常燕生は国家存亡の危機を克服し、中国が社会変革を成し遂げる為には、堅実な社会科学の基礎の上に作り上げた正確な人生哲学と社会哲学が必

要であると考えた。

常燕生の言う生物史観とは、19世紀半ばに西洋で発生した「社会有機体論」或いは「社会ダーウィン主義」を指す。有機性の社会集団は単細胞生物が複細胞生物へ、低レベルの細胞が高級複細胞生物へ進化するかの如く、最初はごく単純なものから次第に高等の組織と機能を備えた近代国家有機体へと進化すると考えるものである。常燕生はロシアの学者素羅金（スラージン）の説に従い、哲学的有機論、心理的有機論、生物的有機論の三種に分類し、生物的有機論、即ち社会自体を生物有機体の特殊な類型と認識している。<sup>20</sup>生物生存競争の原則を個体の優劣ではなく、集団に適用織が複雑で活動の強いものが生き残ると考える。彼は国家を一つの生物、有機体であるとみなすが故に、国家の存続と発展に際しては生物学上から全ての生存発展の原則を見つけ出すべきだと示した。無論、こうした進化論的発想自体は常燕生の独創ではない。中国で西洋近代社会科学の紹介が本格的に始まったのは日清戦争前後であり、特に注目を集めたのが進化論であった。被抑圧国が進化論の一般的概念である生存競争・優勝劣敗の法則によって富国強兵を講じることは、抑圧国の圧迫へ対抗するものであり、ナショナリズムはこの対抗意識の下にごく自然的に発生するものである。<sup>21</sup>多くの先鋭的知識人が自らの人生観やイデオロギーを進化論から唯物史観へと転換するなかで、常燕生がもはや時代遅れとされる生物史観に固執するのは、進化論の導入によって、ナショナリズムの成長が促進される点に着目していたからであろう。

常燕生は、こうした近代国家有機体への進化の過程を四つの発展段階に分け、全てこの直線的な進化の法則に基づくものと見なした。そのプロセスは時間軸上に血族社会、部族社会、民族社会、国族社会を順に位置付けている。第一段階は原始野蛮人類に見られるような血統関係を中心とする血族社会であり、その組織力は弱い。この血族社会が競争や接触を経て合併し、より大きな組織となり、酋長制度による部族社会になる。この社会の集団意識は希薄であり、宗教によって形成される。部族社会同士が競争すれば、たとえ希薄であっても集団意識をもつ部落が勝ち残り、それが無い部落が敗れる。さらにこの生存競争で生き残った社会は拡大と合併を経て第三段階の民族社会へと進化する。この社会では、酋長制度から政府に替わり、分業化が進み、職業や階級制度が成立するなど組織はより複雑化する。また、鮮明かつ複雑な民族意識が醸成され、集団組織はより強固となる。常燕生の見解では、有史初期の遊牧民族や旧式の

王国同様に、「五千年來の中国もおおかたこの段階に留まっている」のだという。さらに、第四段階の国族社会は国家を原型とし、国家意識と国民性が成熟した社会を意味する。<sup>22</sup>

このように、社会は組織を拡大・強固にしながら進化すると同時に集団意識を発達させるのだと捉えている。常燕生は国際社会における中国の後進性をこの「民族社会」の中に認めた。だから、救国の為、換言するならば中国が国際社会で生存し、競争に勝利する為には、進化の段階を第四段階の「国族社会」へと進めなければならない、という明快な論理となる。そこには只、前進だけがある。強者、弱者というものを、個の優劣に基づいて判断するのではなく、それぞれの近代国家有機体としての発展段階の差で決定する。国の力の大きさは国族精神の如何による。国民の意識及び精神がどういうレベルに到達したかが国家の強さに該当する。こうした考え方は、ヘーゲル哲学が一旦没落した民族が他の制度を採用しても所詮はそれが自らの物ではないから発展に限界があるとみなす<sup>23</sup> のとは異なり、楽観的である。現状を自覚し、進化さえ遂げれば、眼前の未来は明るいのであるから、被抑圧民族の社会変革を促進する上では有効的発想といえよう。

上述のように、常燕生は生物史観の観点に立ち、自然界の優勝劣敗、自然淘汰の法則が絶対であると捉えた。そして「アヘン戦争の教訓は、すなわち中国が未完成の近代国家機構の民族であり、現在の世界では生存できないことを証明している」のであり、中国人が列強の侵略を受けるのは、列強が各方面において中国より勝っているからだとして述べている。さらにこうした現実に対して、「天や人に責任転嫁するのではなく、中国自身の過去の行為を詳細に検討すべきだ」と説いている。<sup>24</sup> ここにみられるのは悲惨な中国の状況を現実のものとして客観的に受け止め、過去の歴史を検討し未来に向けて前進する積極的な姿勢である。

『国論』が政治を論じないで思想を論じる点において、『新青年』を彷彿させるということは前述したが、更に常燕生が生物史観を論じる際、かつての陳独秀同様に実証主義者コントの説を引用している。<sup>25</sup> こうしたことは、陳独秀からの影響と、五四という原点からの再出発、伝統の破壊だけでなく新たな建設を示そうという姿勢だと考えられる。ただ陳独秀と違うのは、常燕生が自らの理知でよいものだけを取捨選別している点である。常燕生は中国の歴史を検討し、およそ以下のように述べた。

アヘン戦争以後辛亥革命までの維新運動では、「中国の伝統文化は本来最も優れている」との認識の下、武器や政治組織全体の摂取といった表面的な改革だけで、依然として中国人の基本観念と行動は儒家の家族主義に支配されていた。「当時の社会は家族、部族、民族の三段階が混合する社会」であり、「一個の中国人が政治に参加するのは祖国への献身の為でなく、公衆に替わって服務する為でなく、己の生活の為にするものである」という観念に従い、「政治と家族の私利が一致していた」。故に、「辛亥革命の後に袁世凱の復古反動思想が現れた」のである。

だから、「政治を軌道にのせる為にはこの観念を打破すべきであり、社会組織と社会意識を改変しなければならない」のである。こうした中国の需要を的確に把握した『新青年』は、確かに思想文化の問題を取りあげメスを入れたが、「伝統社会機構と思想を打ち砕いただけ」で、「未来の中国建造においては何ら有効な意見を提供しなかった」ので、中国政治社会の混乱を招いた。五四新文化運動の問題は、「中国の未来の発展への路を理解していなかった」こと、「西洋近代文化の本質と社会の進展変化の基本的趨勢に対して全体的観念がなかった」ことにある。「当時の彼らの共通認識は、デモクラシーとサイエンスを思想運動の中心とする浅薄な観念」であったが、「民主主義と科学は国族社会の道具であり、近代国家組織と意識が完備されたところでしかその効力を発揮しないことを彼らは知らなかった。」<sup>26</sup> こうした反省から、近代国家組織と意識の重要性を指摘している。

ところで、常燕生の「集団主義」の立場から言えば、社会変革を妨害するのは、「家族主義（即ち旧中国の伝統）」、「個人主義」、「階級主義（即ち共産主義）」である。常燕生は生物史観に基づいて、社会科学思想の進化の順序を、個人主義→マルクス主義→集団主義と位置付けた。個人主義は、社会を多くの独立する個人が集合してできたものと認識するもので、「社会原子論」というものがこれにあたる。集団主義は、社会を独立した有機体として認識し、個人はその有機体内の細胞に過ぎず、階級は有機体内の器官に過ぎないと捉えている。その中間に位置するのが階級主義であるマルクス主義で、社会は数個の階級が対立して成っていると認識するものである。常燕生は、そのような位置付けから、マルクス主義が既に陳腐な学説であると主張した。<sup>27</sup> 一方、社会集団意識の進化の過程で、社会有機体は精神方面においては次第に社会集団の人格を醸成するが、これを社会集団性とも呼ぶ。この種の集団性自身は一つの完全独立した

ものであり、それはあたかも我々の人格個性が完全独立しているのと同様である。各国には、その国の集団性があり、この集団性からすべての思想、文物、制度、風習が産出される。人類歴史上のすべての思想、文物、制度、風習の構成は、その根底はすべてこの社会の集団性から出るものであり、その発展もまた、社会集団性の決定を受ける。故に社会集団性は歴史の進化を決定する原動力である。この社会集団性が高度に発展したものを、民族性、国民性、あるいは国族性と呼ぶ。国族性は①自然環境の圧力をコントロールでき、②政治経済などの形式を決定でき、③文化や思想の形式を決定することができる。例えば同一の社会主義や制度、宗教などが各々の国で同じでないのは、すべて国族性が影響しているからである。<sup>28</sup> 常燕生は創刊号にギュスターブ・ル・ボン著「民族進化の定理」の中国語訳本への書評を載せている。それによると、同訳本の訳者は張公表であり、1935年4月に商務印書館から出版された（日本では明治43年に既に大日本文明協会から『民族発展の心理』の書名で和訳出版された）。彼はルボンの説に対し、

民族の優劣は完全に組織力の強弱に依るのであって、社会組織の段階の高低と集団意識の強弱で決まるものである。…人類が禽獣に勝るのは決して人類が聡明だからではなく…人類が優勝であるのは、集団組織の生活が十分発展しているが故のことである。…「品性」について言えば、ルボンの説はますますわけがわからなかった。本書において、品性と国民性をむやみに使っているが…<sup>29</sup>

ルボンの説に対しては、道徳性と品性の点で異議を唱えている。つまり基本的に彼は、優劣を決定するのは個の才能の優劣ではなく、集団としていかに機能しているかにあると考えている。

常燕生は中国知識人の間であまりに経済史観の影響が強く、固執し過ぎていて、発想がそこから脱却できないことを問題視し、さらに中国知識界の前線にある主導者の現況に対する認識不足、即ち危機的状況下でありながらも中国の伝統的発想である和平や世界大同の実現を夢見ていることを批判している。また、こうした特質は中国伝統に由来するものだということ指摘した上で、伝統的心理を改めることの困難さ、国民性が民族的思想をいかに支配しているかを再確認している。



## おわりに

常燕生の性格について、黄欣周は実に興味深いことを言っている。黄によれば、抗戦と世界の戦局に対して、多くの者が内心では悲観し、懐疑の念を抱いていた中で、常燕生だけが楽観していたというのである。そして如何なる悪い知らせを耳にしても、彼の最後の勝利に対する自信は全く揺るがなかった。「民主世界全体の前途から着眼するとすれば、我々は実際何も悲観しなくてもよいのだ」という彼の言葉からもわかるように、彼のそうした態度は、実は合理的道徳判断の結果であった。<sup>30</sup> 確かに 1930 年代半ばの彼の主張からは、全くといってよいほど悲観的なものが感じられず、ただ、そこにあるのはきわめて積極的な姿勢である。常燕生の遺著「歴史鉄則所告訴我們的」を見ると、常が生物史観を絶対の法則と信じ、如何なる民族や反動勢力もこの法則から逃れられないとしている。<sup>31</sup> ところで、彼は執筆に意欲的な一方、名利欲が希薄だった。生前就いた役職も周囲の強い推薦によるものであり、その清貧さの極めつけは、国府委員就任後、南京にある官邸に住まず、政府が配給した車の受け取りを拒否、以来一度も乗ることがなかったという逸話にある。<sup>32</sup> これは、単に性格が清貧なだけでなく、彼が『国論』で論じたように、家族主義の下では政治は家の為だったが、国家の為であるべきだということの実践であろう。

以上のように、常燕生の思想の出発点は救国であり、改革路線は伝統的手法として伝統的な学生による愛国主義的運動の路線を志向した。彼は『新青年』で陳独秀が西洋と伝統中国を対比させ伝統を完全に破壊したようなことはせず、士大夫伝統の理知の判断によって（社会有機体論を以って）科学的に、合理的に判断し、取捨選択する。彼は生物史観を提唱する前も後も、救国という差し迫った現実の危機を何より重んじた。中共に拠らない中間派・民主派の知識人の一つの生き方として、これを中国思想史の中で位置付けることを今後の課題としたい。

## 注

- 1 常燕生（常乃憲、字は燕生）1898年12月、山西省に生まれる。李義彬編『中国青年党』（中国社会科学出版社、1982年）の340～341頁では、主要頭目の一人として略歴が紹介されているが、周淑真氏の『中国青年党在大陸台湾』（注9参照）では、常燕生を含んでいない。おそらく彼が中国青年党創設者の一員ではない等の理由によるものと思われる。しかし、常燕生は党機関誌の編集など執筆活動の他、閻錫山の機密秘書、1947年には国民政府政務委員にも任じられた。彼の執筆

能力は党内でも定評があり、①曾琦は自ら文に長けていながら、党内外に対する告知文が長く流暢にしたい時は常燕生を指名した（左舜生「懷念曾琦（一八九二—一九五一）」、『曾琦先生文集』下、1607頁）。②青年党の宣言文の十中八九は彼による（陳善新「常燕生先生精神永在」『青年生活』第十九期 1947年7月1日）。また、常燕生は古文にかなり精通しており、中学生時代に山西教育庁が挙行した全省国文競争で第一位に選ばれたという逸話がある。また郝樹侯「山西省立教育学院概況」、『山西文史精選』9）によれば、多数の弟子を持つ古文家で山西大学教育学院院長の郭氏が『大公報附刊』に掲載された常燕生の「故都賦」を高く評価したことから、常燕生が1933年同学院で教鞭をとるようになったとあり、以上の事からもそれが立証される。

- 2 彭明「五四運動史」人民出版社 1998年12月、227頁
- 3 中共中央馬克思列寧恩格斯斯大林編訳局研究室編『五四時期期刊介紹』第一集、76頁
- 4 同上書、68頁。
- 5 常乃惠「中国民族与中国新文化之創造」『東方雜誌』第24卷第24号、1927年12月。
- 6 同注3、73頁。
- 7 陳善新「常燕生先生精神永在」『青年生活』第十九期、1947年9月。
- 8 常燕生「野戦抗日」、『民声』第四期、1931年10月24日。北京の中央公園で同じ内容の講演をおこなった。ここでは、たとえ弱小国であっても、中国は徹底的に武力で抵抗すべきだと訴えた。
- 9 黄欣周「哭常先生」『青年生活』第十九期、1947年9月。
- 10 例えば『国論』には、黄欣周の「進化與組織」（第一卷第四期）や「生物演化論之發展」（第二卷第六期）、宋漣波の「互助與競争」（第一卷第十一期）などがあり、常燕生の思想が党内に影響していたことがわかる。
- 11 周淑真『中国青年党在大陸和台湾』中国人民大学出版社、199年、142～3頁。
- 12 「発刊辞」『国論』創刊号、1935年7月20日。
- 13 蔡尚志「現代支那思想の概観」神谷正男訳編『現代支那思想の諸問題』、生活社、1940年、12月。
- 14 陶希聖「最近の中国思想界」、前掲『現代支那思想の諸問題』。
- 15 常燕生「国人對於中国共産党運動應有的認識」『国論』第一卷第五期、1935年11月20日。
- 16 常燕生「生物史觀與唯物史觀的比較」『国論』第二卷第六期、1937年2月15日。
- 17 常燕生「除三害」、『国論』第一卷第六期、1935年12月20日。
- 18 「発刊辞」『国論』創刊号、1935年7月20日。
- 19 常燕生「生物史觀的研究」、『国論』第一卷第十二期、1936年6月20日。
- 20 同上
- 21 彭澤周『中国の近代化と明治維新』、同朋舎出版部、1976年8月、191頁。
- 22 常燕生「從生物学觀點上所見的国家」『国論』第一卷第九期、1936年3月20日。
- 23 高峯尾一愚訳『ヘーゲル法の哲学自然法と国家学』論創社 1983年5月。

- 24 常燕生「除三害」、『国論』第一卷第六期、1935年12月20日。
- 25 陳独秀「近代西洋教育」『独秀文存』安徽人民出版社、1987年12月、108頁。及び、常燕生「生物史觀的研究」『国論』第一卷第十二期、1936年6月20日。両者は共にフランスの実証主義者コントが説いた「三段階の法則」（知識の発展を神学的段階・形而上学的段階・実証的段階の3段階に認める）を引用しているが、表現に若干の違いがある。即ち陳は「人類進化を三つの時代に分ける」一方、常は「人類思想の発展を三段階に分ける」といい、陳が「宗教迷信時代」、「玄学幻想時代」、「科学実証時代」というところを常は「神学の段階」、「玄学の段階」、「科学実証の段階」といつている。
- 26 常燕生「现实生活與理想生活—二十年来中国思想運動総検討與我們最後の覚悟」、『国論』創刊号、1935年7月20日。
- 27 常燕生「国人對於中国共産党運動應有的認識」、『国論』第一卷第四期、1935年10月20日。
- 28 同注19
- 29 常燕生「頼朋的民族進化的心理定律」『国論』創刊号、1935年7月20日。ここでいう「品性」は和訳本では「性格」と翻訳されている。
- 30 同注9。黄によれば、常燕生はよく次のようなことを言っていたという。「イギリスは最も常識の豊富な国家であるから、イギリス人は極端に走らず、失敗しないのだ」。また、常燕生は常識を以って物事を判断する人であったとも述べられている。
- 31 常燕生遺著「歴史鉄則告訴我們的」『青年生活』第二卷第四期、1948年5月1日。
- 32 鄭凌蒼「常燕生先生逝世經過」『青年生活』第十九期、1947年9月。